

次世代AI「Claude Opus 5.5」の実力と導入の要諦：性能・コスト・運用の全体像

2026年9月に公開されたClaude Opus 5.5は、100万トークンのコンテキスト長と高度な推論機能を備え、知識労働の効率化に特化したモデルです。性能が向上する一方で、推論強度による費用の変動や、安全機構によるモデルの自動切替といった実運用上の独自の留意点が存在します。

卓越した処理能力とパフォーマンス

● 100万トークンの長大な文脈理解



大規模なコード読や複数資料を一度に読み込み、統合的な分析が可能

● 知識労働の作業スピードが30%向上



資料作成において、従来比でトークン消費を抑えつつ高速な成果物生成を実現

● Adaptive Thinkingによる自律的な推論

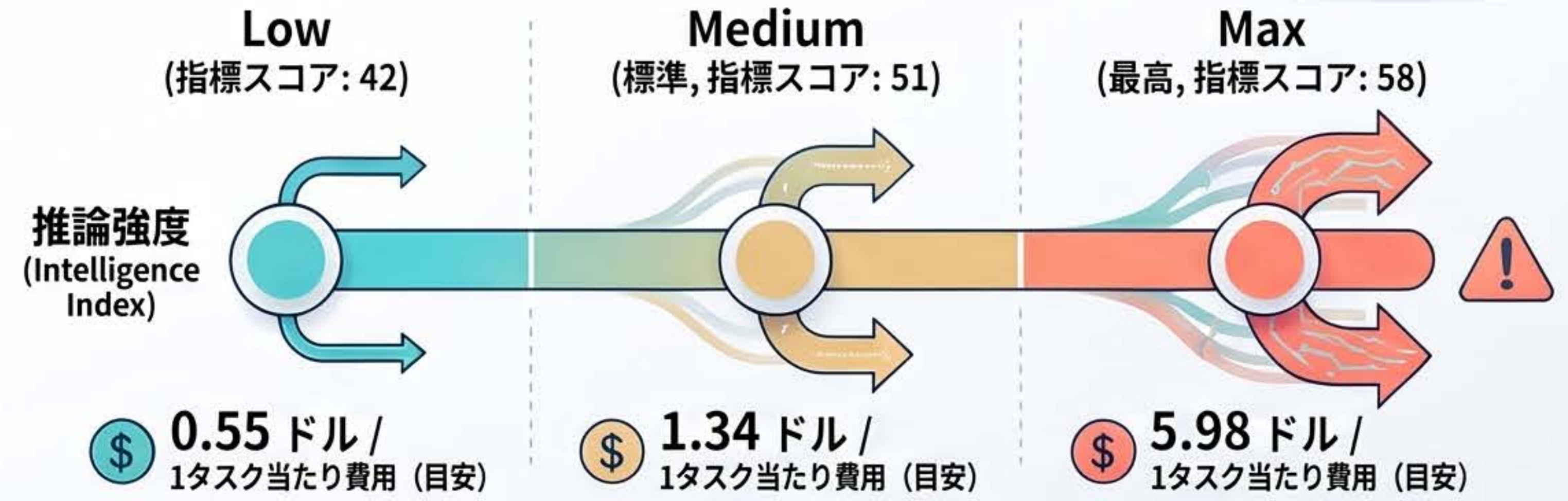


複雑な課題に対し、モデルが思考プロセスを動的に調整して対応

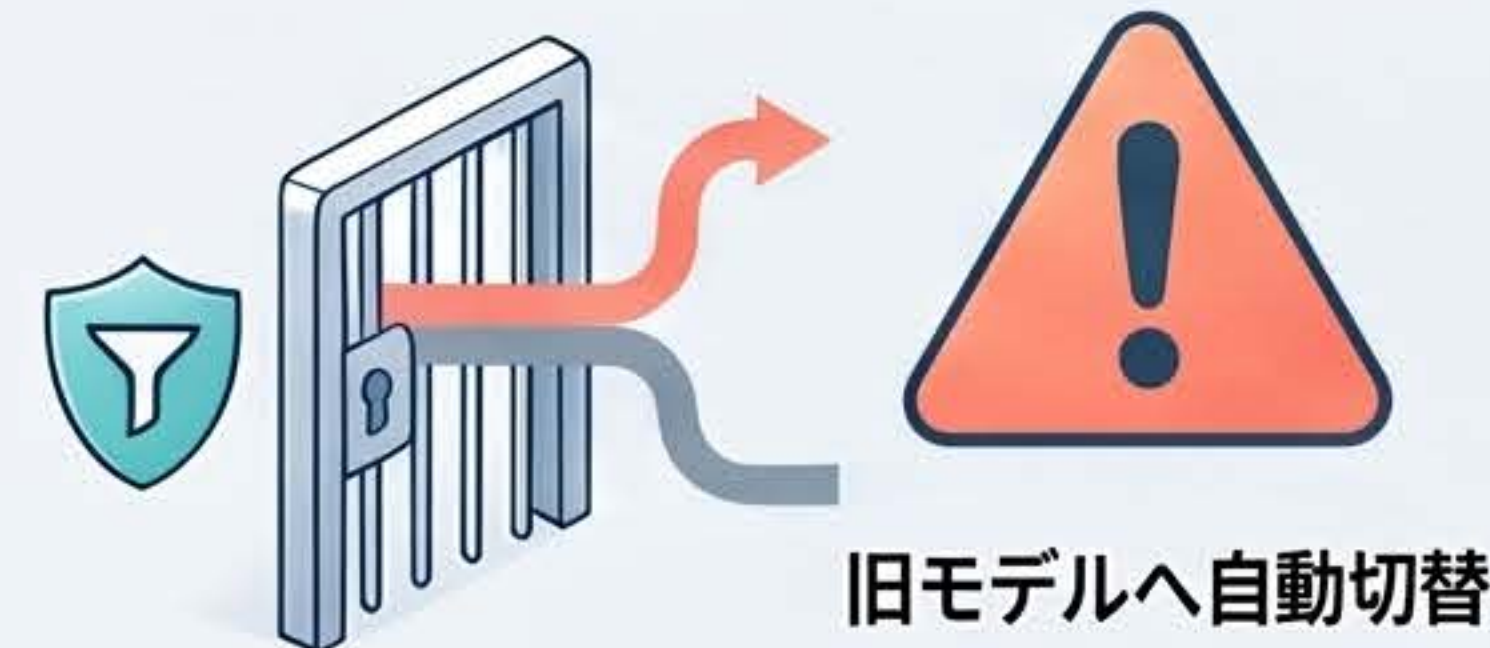
実運用におけるコストとリスク管理

● コスト削減と「推論強度」の選択

基本料金は20%低減されましたが、最高推論設定では費用が約4.5倍に跳ね上がります。



● 安全機構によるモデルの自動切替



高リスクなサイバー・生物学分野の依頼では、旧モデルへ自動で切り替わる場合があります。

● 精度維持のための継続的な検証が必要



図面の細部誤認や、進行表の未完成といった具体的な失敗例も報告されています。